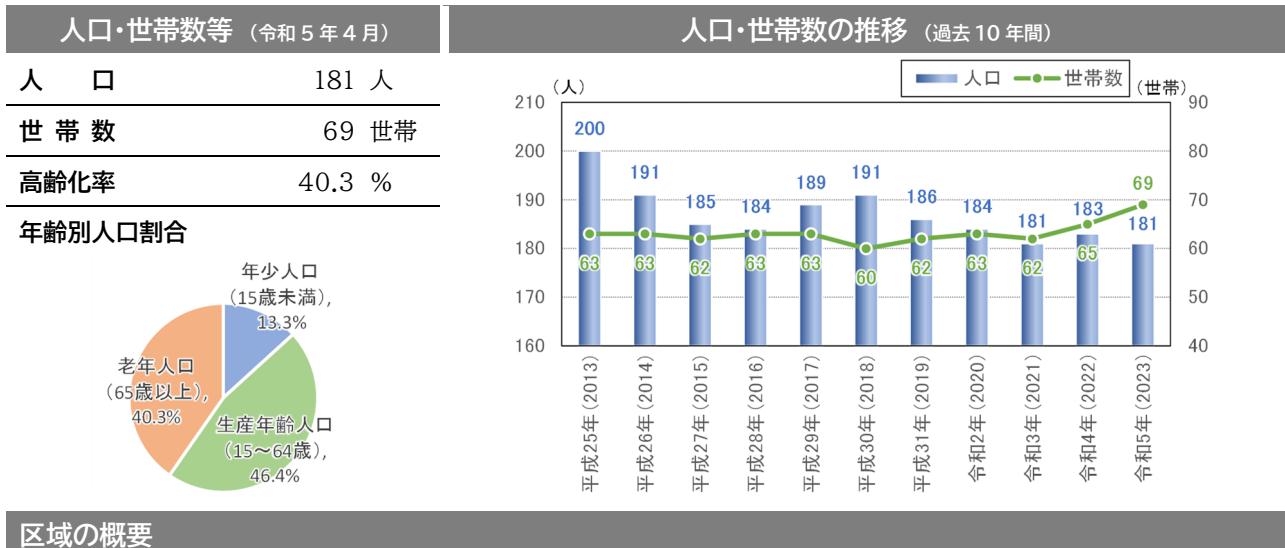


# 三尾 (みお)



## 区域の概要

**立地** 北側に日本海の小湾を抱え、山が海に迫るわずかな傾斜地に小川を挟んで家屋が密集する。集落は、大三尾と小三尾の2集落からなる。

**地名由来** 御火浦とも呼ばれ、昔、神功皇后が船で長門国（現在の山口県）に向かう際、日暮れとなり霧がかかり難航した時に、村人が御火により案内したことによる。先端が三つに分かれた山の尾という地形的な特徴を示す説（「たじま地名考」日本海新聞）や、岬を意味する「御穂」の転訛の説（『ひょうごの地名』（吉田茂樹著））もある。

**歴史等** 三尾の名が確実な資料に出るのは室町期の寛正4年（1463）で、久谷八幡神社に牛二頭が寄進されている（久谷八幡宮棟札写）。弘治3年（1557）の『但馬国にしかた日記』には「にほの浦」と見える。

もとは赤崎村枝郷で、享保12・13年（1727・1728）に赤崎からの独立を願い出ており、享保年間（1716～1736）頃に分村して成立したと思われる。幕府領。家数は、宝暦10年（1760）36、嘉永元年（1848）57、安政5年（1858）65。天保11年（1840）の村高は14石余。

明治22年（1889）東浜村の大字となり、明治24年（1891）からは浜坂町の大字となる。明治24年（1891）の戸数84、人口は男239・女237。昭和25年（1950）に三尾隧道が開通するまでは陸の孤島と言われ、海にまつわる伝承が多く残っている。

## これまで把握している文化財

文化財の件数		95件	(うち指定等文化財		11件)	
大分類	中分類	小分類	把握件数		指定等	
有形文化財	建造物	建築物	2	8	0	
		石造物	4		0	
	美術工芸品	工作物・その他の構造物	2		0	
		彫刻	7		0	
		絵画	2		0	
		工芸品	10		0	
無形文化財	その他の無形文化財	書跡・典籍	4	34	0	
		古文書・歴史資料・考古資料	11		0	
		音楽	3		0	
	演劇	演劇	0	4	0	
		工芸技術	0		0	
		その他の無形文化財	1		0	
民俗文化財	有形の民俗文化財	信仰の場	9	12	0	
		祭具	3		0	
		民具	0		0	
		その他の有形の民俗文化財	0		0	
		年中行事・民俗芸能	10	29	1	
	無形の民俗文化財	民俗技術	0		0	
		食文化	1		0	
		民間話説・俗信	6		0	
		その他の無形の民俗文化財	0		0	
記念物	遺跡	散布地・集落跡・生産遺跡	0	5	0	
		古墳・その他の墓	1		0	
		城館跡・寺社跡	1		0	
		街道・古道等	3		0	
		戦争遺跡	0		0	
	名勝地	その他の遺跡	0	18	0	
		山岳・高原・丘陵	1		0	
		海岸・海浜・島嶼	2		2	
		河川・滝・渓谷・湖沼	0		0	
		公園・庭園	0		0	
	動物・植物・地質鉱物	その他の名勝地	0	10	0	
		動物	0		0	
		植物	2		1	
		地質鉱物	8		7	
	文化的景観		生活・生業・風土により形成された景観地		1 0	
	伝統的建造物群		宿場町・城下町・農漁村等		1 0	



三尾大島(柱状節理)



三尾麒麟獅子舞



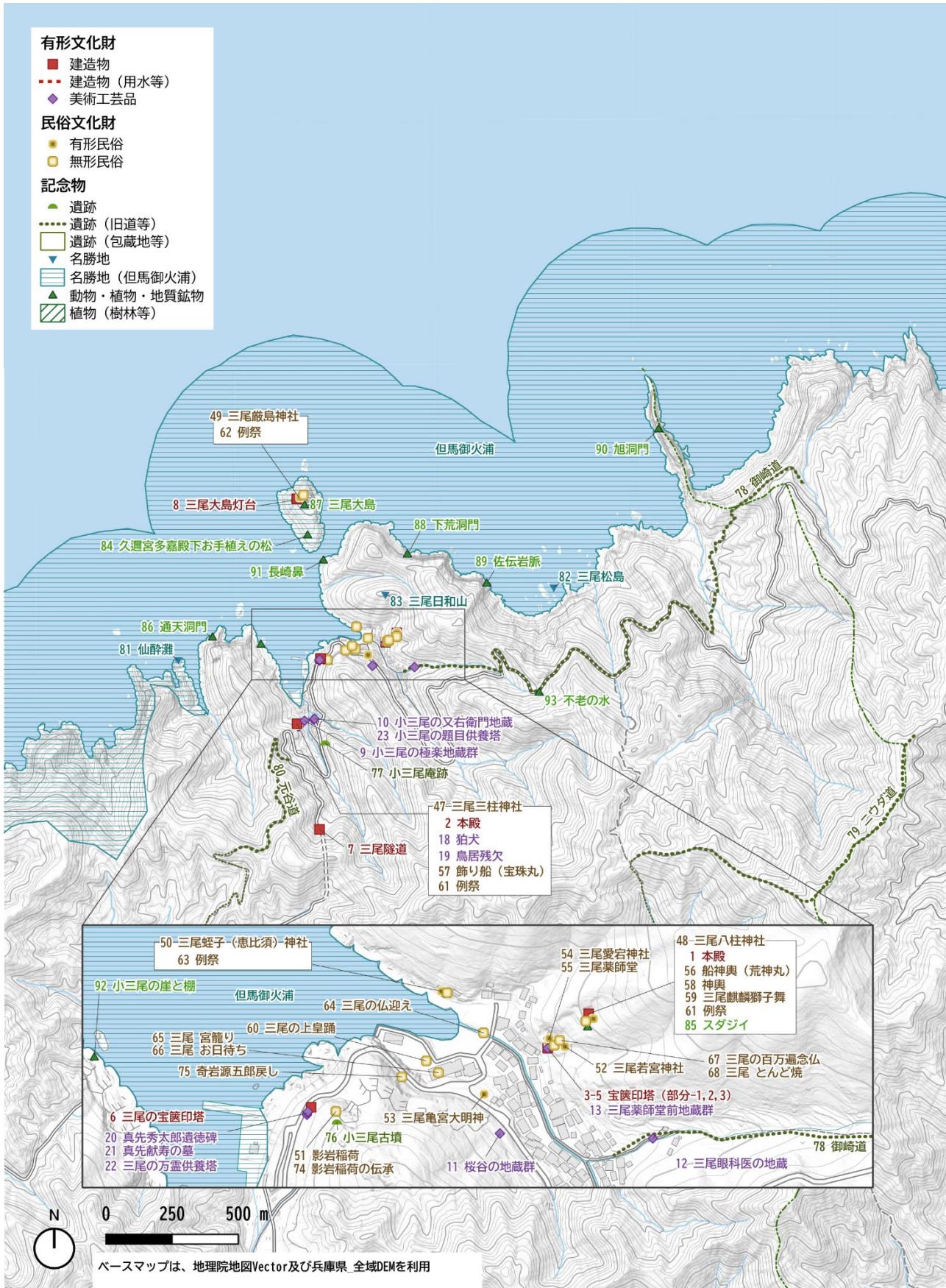
小三尾の極楽地蔵群



三尾八柱神社の船神輿

※人口・世帯数は住民基本台帳（令和5年4月現在）による。

## 文化財の分布



※所在地の掲載可能なものに限る

## 文化財の一覧

## ■ 有形文化財／建造物

分類	番号	名称	概要
建築物	1	三尾八柱神社本殿	欄間の龍、木鼻の獅子、唐破風懸魚（兎毛通）の鳳凰、虹柱や身舎の扉など、細部まで細かな彫刻が見られる。丹波柏原の彫物師中井権次の作であり、本殿身舎脇にも同氏作の木造狛犬がある。
	2	三尾三柱神社本殿	本殿の彫刻は丹波柏原の彫物師中井権次の作。
石造物	3	三尾八柱神社の宝篋印塔（部分-1）	神社籠堂の裏に各所の墓地を整理して寄せ集めた石造物の一つ。反花座1個、宝篋印塔の基礎2個、同笠4個が積み重ねてある。基礎部分は、蓮弁・蓮華文の仕様等から見て南北朝時代の作とみられる。三茎蓮華文や開蓮華文といった近江式文様が見られ、当時この辺地まで伝播していたことを伝える貴重なものである。基礎の上に積まれている4個の笠は室町時代頃の作と見られる。
	4	三尾八柱神社の宝篋印塔（部分-2）	神社籠堂の裏に各所の墓地を整理して寄せ集めた石造物の一つ。宝篋印塔の基礎と、その上に同塔身がのせてある。塔身には、月輪を線刻して金剛界四方仏種子を刻む。室町時代の作と見られる。
	5	三尾八柱神社の宝篋印塔（部分-3）	神社籠堂の裏に各所の墓地を整理して寄せ集めた石造物の一つ。宝篋印塔の基礎1個、正面だけに輪郭と格狭間を彫り、各狭間の中に「親徳」の二文字を刻むが、故人の名と考えられる。他の三面は無地である。室町時代の作と見られる。
	6	三尾の宝篋印塔	真先秀太郎遺徳碑の脇に、六体地蔵と並んで建つ宝篋印塔。一説では、安徳天皇を祀ったものといわれ、昭和30年（1955）頃までは毎年11月6日に祭礼が行われていた。三尾地区の平家落人伝説を伝える。
工作物・ その他の 構造物	7	三尾隧道	扁額などはないが、昭和25年（1950）に建設されたと考えられる。幅員2.6m（車道幅員は1.8m）、有効高2.3～2.4m。昭和52年（1977）に新たに2車線の県道三尾浜坂線が通り、現三尾トンネルが建設された。浜坂方面から現三尾トンネルを抜けたすぐのところに小さな広場があり、「御火乃浦に新しい道拓く」と彫られた現三尾トンネルの開通記念碑がある。
	8	三尾大島灯台	弁財天を祀る厳島神社の傍らにある。地元住民の強い要望で昭和32年（1957）11月1日に完成して初点灯された。光力8,500カンデラ、光達距離25海里、海上からの高さは73m。

## ■ 有形文化財／美術工芸品

分類	番号	名称	概要
彫刻	9	小三尾の極楽地蔵群	かつて、この付近に修行僧が寝泊まりしていた庵寺があり、その庵寺に祀られていた地蔵群が県道の改修によって現在地に集められた。かつては200体の地蔵があったという。
	10	小三尾の又右衛門地蔵（1902年建立）	又右衛門は、明治期に三尾の人たちの病気や怪我を治した人である。自分が亡くなった後は、この石地蔵を拝めば病気が治ると言い、明治35年（1902）に建てた地蔵である。
	11	桜谷の地蔵群（1244年建立）	桜谷の山裾に位置する8体の石地蔵。寛元2年（1244）、大雨による山なだれがあり、7戸が流失する大惨事があった。この時の犠牲者を供養するために建てられたと伝わる。
	12	三尾眼科医の地蔵	真先祐哲が来村する前に三尾に住んでいたとされる眼科医の屋敷跡に、村人が建立した地蔵尊。明治初年（1868）に、その地に別の民家が建てられた時に、約80m北方に移された。
	13	三尾薬師堂前地蔵群	三尾薬師堂南側に宝篋印塔群があり、その傍らに等身大の菩薩像と一緒に52体の地蔵が祀られている。ほとんど風化により顔も形も崩れている。古の話では、五輪塔や宝篋印塔を含めて、現在の数倍にのぼるものがあつたが、心ない者の盜難で持ち去られてしまったという。

分類	番号	名称	概要
彫刻	14	三尾の觀世音菩薩像	三尾薬師堂内に祀られている觀世音菩薩像 2 体のうちの 1 体。弘化 2 年 (1845) に大島の南西側の入江付近で漁師が波間に漂う木造の觀音さまを拾い、大島の弁財天と同じ祠（巖島神社）に安置したと伝わる。50 年目にあたる明治 29 年 (1896) に觀世音菩薩開扇大般若会が行われたが、以後、行われた形跡はない。大正 7 年 (1918) の風水害で大島の巖島神社の屋根が破損した時に薬師堂に移され、安置されている。
	15	三尾薬師堂の弘法大師像	三尾薬師堂内に安置されている。天保 3 年 (1832) に助左衛門が、本四国八十八ヶ寺巡りの際に勧請したものと祀ったとされる。
絵画	16	三尾三柱神社の龍の絵馬	大正期の絵師五松堂泰山筆の絵馬。幣殿通路にある。横 90cm、縦 50 cm の板に龍に描かれている。大正 15 年 (1926) に山陰の地を訪れた時のものと考えられる。
	17	三尾三柱神社の拝殿天井絵馬	大正期の絵師五松堂泰山筆の絵馬。拝殿の天井、広さ 4 坪の中のマス目に人物花鳥の絵が百枚ある。大正 15 年 (1926) に山陰の地を訪れた時のものと考えられる。
工芸品	18	三尾三柱神社の狛犬 (1812 年建立)	文化 9 年 (1812) 7 月建立の狛犬。一対。丹後柏原の彫刻師中井青龍軒彫刻。
	19	三尾三柱神社の鳥居残欠	小三尾の氏神である三柱神社の参道には、不思議な模様をした流紋岩（火山岩）の鳥居跡が残されている。
	20	真先秀太郎遺徳碑 (1920 年建立)	真先秀太郎は、広島、静岡、栃木で県立病院に勤務した後、栃木県で医院を開業し、晩年は郷里三尾に帰り、教育の振興事業として「三尾教育基金会」などを創設した。また、村の近代化計画を立てるなど三尾の発展に努めた。この遺徳碑は秀太郎の功績を後世に伝えるため、大正 9 年 (1920) に三尾区民によって建てられたものである。
	21	真先献寿の墓	天保年間から明治初年にかけて、三尾の医療、教育、政治、産業の振興に尽力した偉大な先人である医師真先献寿（明治 4 年 (1871) 没）の墓。漁師たちは出漁の時に、港の船から墓に向かって手を合わせたという。この墓は、当初六体地蔵堂の傍らにあったが、昭和 40 年 (1965) 頃に県道改良工事に伴って、現在地に移転された。
	22	三尾の万靈供養塔 (1864 年建立)	凝灰岩の自然石型。高さ 120cm。元治元年 (1864) 7 月建立。主碑銘は「三界萬靈」。世話人は仲村芳治郎・仲村六右衛門と刻まれている。
	23	小三尾の題目供養塔 (1901 年建立)	凝灰岩の自然石型。高さ 115cm。明治 34 年 (1901) 6 月建立。主碑銘は「南無妙法蓮華経」。発起人は若ノ森。
	24	三尾三柱神社の狛犬 (1779 年建立)	安永 7 年 (1779) に製作された狛犬。檜製、一対。本殿身舎脇（覆屋内）。丹波柏原の彫物師中井権次の作。
	25	三尾三柱神社の紫編緬幕	文政 3 年 (1820) の紫編緬幕。神祇管領卜部家家紋付。各二張。
	26	三尾三柱神社の桃灯	文政 3 年 (1820) の桃灯。神祇管領卜部家家紋付。各四張。
	27	三尾三柱神社の御鏡	文政 3 年 (1820) の御鏡。神祇管領卜部家。
書跡・典籍	28	三尾八柱神社の扁額 (1559 年)	永禄 2 年 (1559) の扁額。虫食いが甚だしく、作者は不明である。
	29	三尾八柱神社の扁額 (1820 年)	文政 3 年 (1820) の扁額。「京六角寺町西入町、御額師山崎半兵衛」「大宮司八大荒神、神道長部良長」の銘が彫刻されている。
	30	三尾三柱神社の扁額 (1559 年)	永禄 2 年 (1559) の扁額。額師不明。「八大荒神」一面。
	31	三尾三柱神社の扁額 (1820 年)	文政 3 年 (1820) の扁額。額師は京都の額師山崎半兵衛。「八大荒神」「三宝荒神」各二面。
古文書・歴史資料・考古資料	32	三尾村文書	村所有。
	33	中村昌義文書	江戸時代「享保 7 年 (1722) 漁業・海論争関係」他三尾村文書。
	34	脇本正夫文書	三尾村文書。

分類	番号	名称	概要
古文書・歴史資料・考古資料	35	きりしたん禁制の高札	三尾の中村家所蔵。
	36	三尾八柱神社の棟札	永禄2年(1559)、安永3年(1775)、文化10年(1814)の再造営と記された棟札をはじめ、数枚の棟札が残る。
	37	三尾三柱神社の棟札	安永8年(1779)、文化7年(1810)、文政9年(1826)、慶応3年(1867)の棟札が残る。
	38	三尾蛭子(恵比須)神社の棟札	宝暦14年(1764)、寛政10年(1798)、文久元年(1861)、明治9年(1876)、明治39年(1906)の棟札が残る。
	39	三尾巖島神社の棟札	享保21年(1736)、文政2年(1819)、明治29年(1896)の棟札が残る。
	40	三尾下山神社の棟札	三尾下山神社は、大永2年(1522)に伯耆国大山寺法明院から山ノ神、農耕の神として大智明權現を勧請したとされる。昭和中期まで信仰されたが、昭和38年(1963)の豪雪で社殿が倒壊し、ご神体は一部の棟札とともに八柱神社に仮遷宮され、その後再建されていない。享保16年(1731)、文政元年(1818)の棟札が残る。
	41	三尾若宮神社の祈祷札	三尾若宮神社の祈祷札で、「若宮稻荷大明神、栄福寺」と記されており、大正初期の栄福寺による祈祷札である。
	42	三尾龜宮大明神の棟札	延享4年(1747)、文化7年(1810)、安政2年(1855)の棟札が残る。

## ■ 無形文化財

分類	番号	名称	概要
音楽	43	三尾村の歌	大正5~6年(1916~1917)にかけて、三尾尋常小学校に勤務していた旧八田村出身の木村美基の作詞。 ※『三尾の郷土史 みほのうら』(平成5年、三尾郷土史編集委員会編集、三尾区発行) p61 参照
	44	盆踊り唄 (くどき節:平井権八)	※『三尾の郷土史 みほのうら』(平成5年、三尾郷土史編集委員会編集、三尾区発行) p493 参照
	45	盆踊り唄 (くどき節:阿波の鳴門)	※『三尾の郷土史 みほのうら』(平成5年、三尾郷土史編集委員会編集、三尾区発行) p496 参照
その他の無形文化財	46	漁業(松葉ガニ、ホタルイカなど)	町内には浜坂港、諸寄港、釜屋港、居組港、三尾港(大三尾・小三尾)の漁港がある。新温泉町での代表的な漁法は「沖合底引き網漁」で、9月から翌年5月末まで漁を行い、松葉ガニやホタルイカ、ハタハタ、エビ、カレイなどが水揚げされる。

## ■ 民俗文化財／有形の民俗文化財

分類	番号	名称	概要
信仰の場	47	三尾三柱神社	祭神は神速素戔鳴命。創立年月は不明。元暦(1184)以前、山城国八坂神社より分霊を勧請したと伝わる。近世には三寶荒神と称した。明治初年(1868)に三柱神社と改称し、同6年(1873)10月に村社に列せられる。境内社には、稻荷神社(保食神)がある。
	48	三尾八柱神社	祭神は神速素戔鳴命。創立年月は不明であるが、元暦(1184)以前の創立は確かとされる。山城国八坂神社より分霊を勧請したと伝わる。八荒神と称した。明治初年(1868)に八柱神社と改称し、同6年(1873)10月に村社に列せられる。境内社には、稻荷神社(保食神)がある。
	49	三尾巖島神社	近代社格は無格社。三尾大島に祀られている祠で、祭神は弁財天であるが、起源は定かでない。数百年の歴史があるともいわれ、また、平家一族と何らかの関係があるとも伝わる。社殿が大島の頂上にあるため、再三の台風や暴風による損壊で再建が繰り返されていたようである。現存する最も古い棟札は享保21年(1736)のものである。

分類	番号	名称	概要
信仰の場	50	三尾蛭子（恵比須）神社	祭神は蛭子命、大国主命、事代主命。創立年月は不明であるが、古来、蛭子命を祀り、漁業の守護神として村人の信仰を集めてきた。宝暦 14 年（1764）の棟札では、蛭子命のみを祭祀していたようであるが、明治 39 年（1906）6 月 20 日、出雲大社から御分靈、大国主命、事代主命を奉迎、西宮蛭子命の三柱を鎮祭したとの棟札がある。社殿は昭和 9 年（1934）の風水害、昭和 38 年（1963）の豪雪により、それぞれ倒壊、再建されている。
	51	影岩稻荷	祭神は宇迦之御魂大神、佐田彦大神、大宮能売大神、田中大神、四之大神。巨岩が重なり合った洞窟の中に祀られている。創建年月は不明であるが、漁師の守護神として古くから信仰されてきた。天保 15 年（1844）、日本惣本宮から改めて、正一位稻荷大明神安鎮の奥義が授けられている。昭和 34 年（1959）から神職は無住となった。
	52	三尾若宮神社	明治 32 年（1899）春頃からキツネ付きという悪病が流行して村人が困っていた時、高野山の僧が来村し、薬師堂にこもって加持祈祷した。そのとき、祠を建てて狐を祀れと言われて現在地に祠を建てたと伝わる。守護神は法華經守護の三十番神を勧請し祀ったものである。
	53	三尾亀宮大明神	当初は三丁坂の上方山地に祠を建てて祀られていた。創建は定かでないが、延享 4 年（1747）5 月 15 日、玄武大明神と記された棟札が残るため、延享年間又はそれ以前の創建と思われる。漁業者は海難除けの神として、長年にわたって信仰されてきたが、昭和 37 年（1962）の県道拡張工事の時点では倒壊したままであった。昭和 45 年（1970）12 月の冬季風浪で大海亀の亡骸（体長 175cm）が漂着したことから、現在地に埋葬し建立された。昭和 46 年（1971）には大亀之塚が完成した。
	54	三尾愛宕神社	祭神は加具土神。創建年代は定かでないが、三尾では古来、度重なる大火に遭っていたため、防火に対する関心が高く、火防の神として愛宕神が奉斎されたものと思われる。ご神体は京都西方の愛宕神社から勧請されたものとされる。
	55	三尾薬師堂	八柱神社境内に位置する。那須野寺の古文書に、久寿 2 年（1155）、狐狩り行事が書かれており、そのなかに三尾浦に薬師堂あり、との記述があることから、久寿年間又はそれ以前の創建と考えられる。宝篋印塔や五輪塔などの鎌倉時代から南北朝期にかけての石造物が数多く残されている。薬師如来、弘法大師、觀世音菩薩 2 体を安置している。
祭具	56	三尾八柱神社の船神輿（荒神丸）	船神輿の御神船は、もともと八柱神社の飾り船であった。荒神丸の船名がつけられ、秋祭りには鳥居近くに石段の両側にある大イチョウに吊り下げられていた。現在の船神輿に使われている飾り船は、明治元年（1868）9 月に奉納されたものであるが、作者は不明である。全長 241cm、幅 61cm、高さ 65cm で、江戸時代までの旧飾り船が全長 185cm であったことから一回り大きい。昭和 15 年（1940）に祭り行事用の神輿として改造された。
	57	三尾三柱神社の飾り船（宝珠丸）	全長 225cm、幅 60cm、高さ 55cm。三尾三柱神社の飾り船。
	58	三尾八柱神社の神輿	明治元年（1868）に三尾八坂神社に奉納された船模型で、昭和 16 年（1941）に氏子が担ぐ現在の形に改修された。小型の船模型が小三尾の三柱神社にも奉納されており、祭礼の時には、鳥居の下に吊るされる。

### ■ 民俗文化財／無形の民俗文化財

分類	番号	名称	概要
年中行事・民俗芸能	59	三尾麒麟獅子舞	10 月第 2 日曜日の八柱、三柱神社例祭で奉納される。地区の病魔や災害を払うために舞われる。猩々の舞、三段の舞、門付けの舞がある。他の地区に比べ地面に頭をこするように低く舞うのが特徴である。三尾麒麟獅子保存会により伝承されている。 国指定重要無形民俗文化財（「因幡・但馬の麒麟獅子舞」として）

分類	番号	名称	概要
年中行事・ 民俗芸能	60	三尾の上皇踊	後鳥羽上皇が隱岐に島流しとなり、その途中海が時化て三尾の下荒海岸に上陸避難されたことによってできたものと伝わる。8月14日に上皇踊りが行われる。三尾の人たちが下荒海岸から上皇や付き人を村に連れ、新しい船による出発までの心の通じ合いなどを唄った歌も伝わる。また、「思いやれ うめきを三尾の 浦風に 泣く泣くしぶる 袖のしづくを」は、その時に作られた歌として伝わる。
	61	三尾八柱・三柱神社の例祭	10月9日に近い日曜日に行われる。麒麟獅子舞の奉納、船神輿の巡行などがある。
	62	三尾厳島神社の例祭	5月5日に行われる。厳島神社は三尾大島の頂上に鎮座。釜清めにて心身を清め、亀宮さんに大漁を祈願する。
	63	三尾蛭子(恵比須)神社の例祭	7月20日に行われる。厳粛に祭礼が行われ、大漁安全を祈願する。
	64	三尾の仮迎え	8月13日～15、16日に行われる。三尾地区では、浜辺でオガラをたき、念仏を唱えて各戸の仮迎えが行われるほか、その年に初盆を迎えた故人の位牌をのせた祭壇をつくり、村中で精霊を迎える。
	65	三尾 宮籠り	1月末の日曜日に行われる。お宮のこもり堂で実施してきたが、平成31年(2019)から集会所で実施している。
	66	三尾 お日待ち	1月2日、下・中・上の町が揃い、新年の挨拶、宮司の祝詞で厳粛に行われる。
	67	三尾の百万遍念仏	疫病(疫神)鎮送の行事の一つで、念仏をとなえつつ御幣を村境に送る習俗。「仮の口開け」「くり」とも呼ぶ。
	68	三尾 とんど焼	1月7日に行われる。無病息災、五穀豊穣を祈る。
食文化	69	なれずし	イカ・ハタハタ・その他の魚の保存食。三尾では村づくりグループを結成し、イカのなれずしを中心に、ハタハタ、イワシ、サバ等のなれずしを開発して販売している。
民間説話・ 俗信	70	三尾浦の伝承	※『ふるさと浜坂シリーズ1「ふるさと浜坂散歩みち」』(平成4年、浜坂町教育委員会発行) p95 参照
	71	平家落人の伝説(三尾)	※『三尾の郷土史 みほのうら』(平成5年、三尾郷土史編集委員会編集、三尾区発行) p15 参照
	72	高野聖の伝説	※『三尾の郷土史 みほのうら』(平成5年、三尾郷土史編集委員会編集、三尾区発行) p15 参照
	73	後鳥羽上皇の上陸説	※『三尾の郷土史 みほのうら』(平成5年、三尾郷土史編集委員会編集、三尾区発行) p16 参照
	74	影岩稻荷の伝承	※『ふるさと浜坂シリーズ1「ふるさと浜坂散歩みち」』(平成4年、浜坂町教育委員会発行) p98 参照
	75	奇岩源五郎戻し	※『ふるさと浜坂シリーズ1「ふるさと浜坂散歩みち」』(平成4年、浜坂町教育委員会発行) p99 参照 ※『村を支えた人々 -わがふるさと但馬御火浦-』(平成4年、前田國之助著) p66 参照

## ■ 記念物／遺跡

分類	番号	名称	概要
古墳・ その他の墓	76	小三尾古墳	古墳時代の古墳。横穴式石室。須恵器片が出土。道路拡張のため全壊。
城館跡・ 寺社跡	77	小三尾庵跡	道路拡張のため半壊した。4mくらいの平坦面がある。

分類	番号	名称	概要
街道・古道等	78	御崎道	三尾から御崎（香美町）への道は、山越え・谷越えの連続する細い道であった。平家落人伝説の三尾上陸が眞実とすれば、800年以上の歴史をもつ道であるといえる。
	79	ニウダ道	大三尾の南西側を山越えして和田村に通じる道。古くからの道であるが、他の村との往来に利用する主要道としての役目はなく、間道としての役割を果たしていたものと思われる。昭和初期頃までは「駆落ち道」の異名が残っており、その昔恋愛した若い者同士が親の反対で結婚できないとき、この道を駆落ちして村を出て行った道と伝わる。
	80	元谷道	小三尾の南にある山を越えて赤崎に通じる道で、隣村へ通ずる道のなかでは距離も一番短く、かつては他地区との交流によく利用された主要道路でもあった。記録によると、安永2年（1773）に道の改良工事が行われて峠の切下げ等が行われた。

### ■ 記念物／名勝地

分類	番号	名称	概要
海・海岸・島嶼	81	仙酔灘	三尾の西方、須井の浜は仙人も酔う灘（海岸）と呼ばれている。臥虎島あたりは、岩脈洞門が破壊された後の断崖を見せていて、その色彩が美しい。 国指定名勝及び天然記念物（「但馬御火浦」として）
	82	三尾松島	三尾の松島は三尾大島東の浜にある。浜は鳥帽子岩、天子岩などの奇岩怪石や小島が点在し、その磯浜の景観は素晴らしい。 国指定名勝及び天然記念物（「但馬御火浦」として）
山岳・高原・丘陵	83	三尾日和山	三尾港は、常時廻船が出入りする港であったとは考えられず、三尾の日和山は、日和を見るというより、沖に出ている村の漁船に火急を知らせる信号所・のろし台であったと考えられている。

### ■ 記念物／動物・植物・地質鉱物

分類	番号	名称	概要
植物	84	久邇宮多嘉殿下お手植えの松	昭和5年（1930）8月、当時伊勢太廟宮司であった久邇宮多嘉殿下並びに妃殿下が三尾を来遊されたときの御手植えの松が三尾大島に残る。 国指定名勝及び天然記念物（「但馬御火浦」として）
	85	三尾八柱神社のスダジイ	三尾八柱神社境内のスダジイ。環境省巨樹巨木林データベースによると、幹周3.20m、樹高27m。
地質鉱物	86	通天洞門	通天洞門は洞窟の天井がぬけて空が見えるので通天洞門と呼ばれている。洞門はほぼ南北方向にできた奥行き60m、幅10～4mの洞門である。 国指定名勝及び天然記念物（「但馬御火浦」として）

分類	番号	名称	概要
地質鉱物	87	三尾大島	高さ60m、周囲約1kmの小島で、300万年前頃に入り込んだマグマが固まってできた岩石で形成される。島全体に多角形の柱状節理が発達し、特に南東側の岩壁は、無数の柱状節理とそれを切る板状節理が景勝をつくる。 国指定名勝及び天然記念物（「但馬御火浦」として）
	88	下荒洞門	三尾大島の東にあり集塊岩と安山岩の交差した二つの岩脈部が崩落してできた洞門。西側入り口は幅12m、高さ17m、長さが63mの東西方向へ開放した広い洞門で、遊覧船が航行できる数少ない洞門である。 国指定名勝及び天然記念物（「但馬御火浦」として）
	89	佐伝岩脈	下荒洞門を東南へぬけた所にある松島岩脈。地質学者の佐藤伝蔵が、松島岩脈を標式的なものとして賞賛したことから、佐伝岩脈の名となった。

## 1-08 三尾

		国指定名勝及び天然記念物（「但馬御火浦」として）
90	旭洞門	香美町の町境にある鋸岬は火碎岩でできており、鋸の形に似ているところからその名前になっている。その中央部に旭洞門がある。洞門から朝日がさす景色の素晴らしさから洞門の名前は名付けられている。旭洞門は、海面から4mほどの高さにあり、幅6m・高さ8mの大きさの洞門である。 国指定名勝及び天然記念物（「但馬御火浦」として）
91	長崎鼻	流紋岩の岩山からなり、表面に無数の節理が発達している。流紋岩の岩山を切った断層の間に、噴出したマグマが冷え固まってできた岩脈。大島との間は「通り戸」と呼ばれ、流れが速く、マダイなどの釣り場となっている。 国指定名勝及び天然記念物（「但馬御火浦」として）
92	小三尾の崖と棚	木片の化石を含む砂岩層が見られる。 国指定名勝及び天然記念物（「但馬御火浦」として）
93	不老の水	岩盤の割れ目から湧き出す澄んだ水で、一年を通じて水は枯れない。周辺の岩は日本海が開き始める2000万年前頃の火山活動で流れ出た溶岩などで、かつてここに大きな火山があった証拠である。

### ■ 文化的景観

分類	番号	名称	概要
生活・生業・風土により形成された景観地	94	三尾港	町管理の第1種漁港（利用の範囲が地元の漁業を主とするもの）。

### ■ 伝統的建造物群

分類	番号	名称	概要
宿場町・城下町・農漁村等	95	三尾集落	集落背後の谷津田は美しい造形をみせ、取り囲む山林によって独立した景域を形成している。『但馬ランドスケープ広域計画報告書』では主要な漁村の一つとしてあげられている。

### 自治会の区域における歴史文化・文化財の記録作成等の取組

- ・『三尾の郷土史 みほのうら』  
(平成5年10月、三尾郷土史編集委員会編集、三尾区発行)
- ・『村を支えた人々 -わがふるさと但馬御火浦-』  
(平成4年5月、前田國之助著)

